

灯火法語

ビリの子は まだ懸命に 走りいて マイクは 次のプログラム告ぐ

『朝日歌壇・牛島正行さん』

●夏休みも終わり、しばらくすると運動会のシーズンがやってきます。子どもにとつては、たくさんの人から見られて、緊張のひとつときます。練習を重ねて、発表する遊戯や「かけっこ」などの手に汗握る競技の数々。できれば、我が子の活躍する姿を期待してしまうのは、親の性でしょうか。ダンスなどの演目では、堂々と上手に踊って欲しいし、かけっこなどの競技では、できれば一等賞にと、我が子の活躍する姿を願ってしまいます。

●私の子どもの頃を振り替えてみると、運動会と聞けば、ワクワクして楽しみだったタイプなのですが、もしかしたら、子どもによっては「運動会」が嫌で嫌で、不安

を抱えた子もいるかもしれませんね。

例えば、うちの娘の一人は、運動が苦手という訳ではありませんが、とても恥ずかしがり屋さんです。人の前立って注目を浴びるのが苦手なようです。昨年も一昨年も、運動会のお遊戯では踊ることもできず「かけっこ」でも、恥ずかしさのあまり、スターラインにすら立てませんでした。

運動の得意、不得意。体格も性格も成長もそれぞれ違う子どもが、一列に並び、必然的に一等やビリといった順位や勝ち負けがつく「かけっこ」などの競技は、社会の縮図のように、ときに厳しさを感じます。

●「ビリの子は まだ懸命に走りいて

マイクは次のプログラム告ぐ」

走るのが速く、一等賞でゴールして喜ぶ子とは対比的に、運動が不得意なのでしょうか、皆がゴールしても「ビリの子」はまだ一生懸命に走っています。進行係がもう少し待ってあげればいいのに、会場に鳴り響くマイクの声は非情にも、淡々と次のプログラムに進みます。

それでも「ビリの子」を見つめる、あたたかな眼差しがあったはずです。陰で「頑張れ、頑張れ」と最後まで応援する、お父さん、お母さんの姿が目に見えそうです。

●人間社会のものの見方には「勝負」「優劣」

「順位」「評価」など、人と人が比べられていく世界があります。勝ったものは注目され、褒め称えられますが、「ビリの子」は注目もされることもなく、見下されてしまうこともあります。そんな比較の世界には、勝者の陰で、負けた側の苦しみがあります。

●ところが、阿弥陀如来のさとり境地である「平等心」には、比べることのない「あたたかさ」があります。平等心とは「生きとし生けるものを分け隔てなく、ご覧になる慈悲の心」です。そこには、一番やビリ、勝ち負け、優劣といった分け方はなく、すべての命には、掛け替えのない尊さがあると、おっしゃるのです。また平等心のことを「一子地（いっしじ）」とも言います。「一子地」とは「あらゆる命を我が一人子のように、代わりのきかない大切な存在であると、受けめることのできる境地」です。

ですので「一等賞」のような喜び感じるときも「ビリの子」のような悲しい気持ちになるときも、どんなときも阿弥陀如来は私たちを比較することなく、平等に見守り「何があってもあなたは、私にとって、大切な子だよ」と、抱きかかえて下さっているような仏さまなのです。 南無阿弥陀仏